

戦争を知らない
世代へ④東京編

焦土からの叫び

3.10 東京空襲

戦争を知らない世代へ ④ 東京編

焦土からの 叫び 3・10東京空襲

創価学会青年部反戦出版委員会

第三文明社

戦争を知らない世代へ④

焦土からの叫び——3・10 東京空襲

昭和50年3月10日 初版第1刷発行

編者 創価学会青年部反戦出版委員会

発行者 山崎善智

発行所 株式会社 第三文明社

郵便番号 101 東京都千代田区猿樂町2-5-4

印刷所 凸版印刷株式会社

©1975 printed in Japan

発刊の辞

庶民の戦争体験は、空襲全体からみれば部分にしかすぎない。しかし、部分を無数に重ね合わせていくと、昭和二十年三月九日夜の東京空襲、特に江東区の状況が、明確にイメージづくられてくる。部分を積み重ねていくことによって全体像が浮かんでくるといふわけだ。もちろん、被害を受けた本人にとって、その体験は、部分的なものではなく、全存在的なものである。

大岡昇平氏は、レイテ島の戦闘の全体像を描くことにより、当時の自らの置かれた状況を把握すると同時に、自分の人生を左右した力の実態が一体何であったのか、戦争とは、戦闘とは一体何であったのかを解明しようとした。我々は、庶民の体験を無限に収集し、積み重ねることにより、戦争の実態を、全体像を明らかにすることを希望するのである。個人の体験は、風化しやすいし、継承も不可能であるかもしれない。だからといって、我々は手をこまねいているわけにはいかない。できうる限りの体験を収集し量を質へと転化させる戦いを進めていかなければならない。

私たち創価学会青年部は昭和四十八年二月の第二十一回青年部総会において、信仰者としての社会的責任の立ち場から「生存の権利を守る青年部アピール」を採択し、以後、反戦平和運動を

多面的に展開してきた。その重要な柱の一つとなるのが、戦争を知らない世代へのこの反戦出版活動である。地道ではあろうが、持続しなければならない作業であると考える。

我々の活動が一つの捨て石となって、このような試みが増え、平和戦線の拡大へと連なっていくことを期待し、この書をまとめたしだいである。

取材活動、編集活動に献身的に働いてくれた江東区のメンバー、また、出版製作にあたってくれた反戦出版委員会のメンバーには感謝の意を表すると共に、今後の一層の精進を決意するものである。

昭和五十年三月九日

創価学会青年部東京青年部長 千葉国男

目

次

発刊の辞 1

平和への証言……………	早船増枝	11
『抜刀の警官』を想い出す……………	須藤慶司	15
戻らぬ酒屋の主人……………	高尾憲太郎	20
地獄と化すわが町……………	村井盛義	24
失った、我が妻、我が子……………	大木正信	27
二百名に達った救助……………	内田重蔵	32
残酷で悲惨な戦争……………	庄野実	35
泣きながら焼死体の上を歩いた私……………	山口富士枝	40
安穏な日々を失いて……………	河合ツタ	43
雑踏の中の叫び……………	若林梅吉	49
防空壕の焼死体……………	井上秀之助	54
防火用水の中で死んだ弟……………	佐野幸一	58
飛び散った隣人……………	喜多村タイ	63
亡き父の時計……………	泉水信子	66
最愛の家族を失いて……………	国分仁作	70

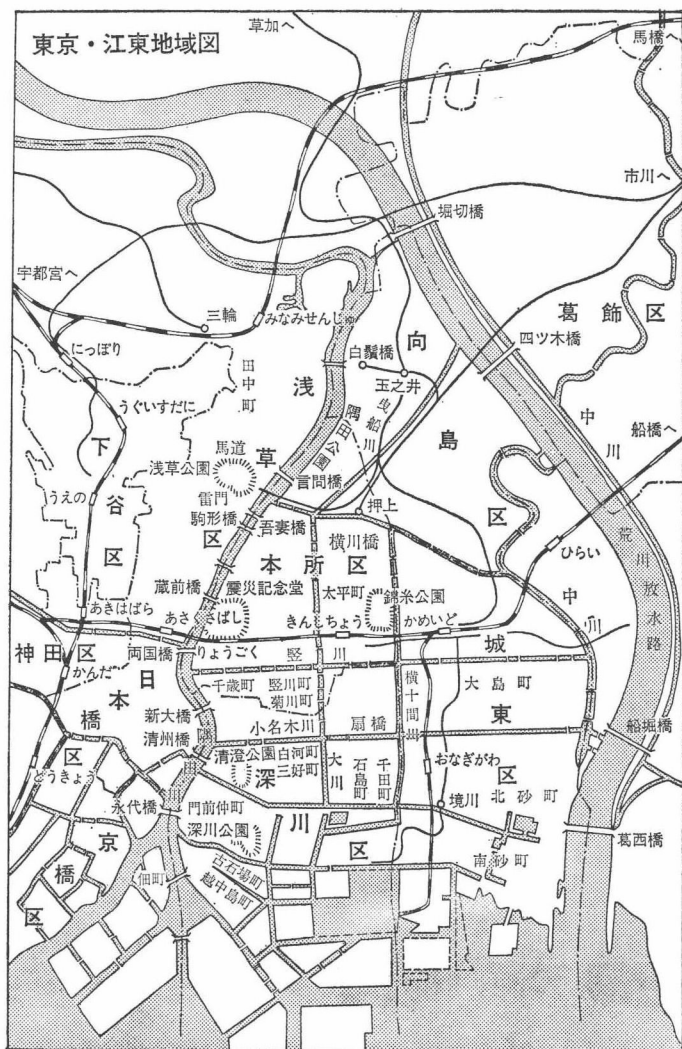
焼人形.....	堀内虎雄	75
戻らぬ母と姉.....	一ノ瀬嘉藤太	80
歸らなかつた父.....	橋本博吉	85
防護監視班として大空襲を思う.....	松江嘉治	91
一人生き残つて.....	小山 秋	94
新潟で戦災を知る.....	山本元三郎	97
恐怖の明治座で九死に一生.....	飯塚なほ	101
夜空に浮かぶB 29.....	佐山信吉	104
猿江公園の惨状.....	吉田興作	106
東京大空襲から広島被爆まで.....	吉田富雄	110
無惨な菊川橋.....	千葉辰治郎	117
十間川に身を投げて.....	根津茂一	121
防火班長として.....	山中徳治	124
焼夷弾でくずれた陸軍造兵廠.....	奥川英治	127
わが郷土を焼かれて.....	福田萬藏	132
戦禍を逃がれて.....	伊藤 仁	136
生涯忘れ得ぬ日.....	染谷仁子	140

生と死の間を乗り越えて	橘川力恵
幼な心に戦争の恐怖	坪谷道代
空襲の日に生まれた子	中川政吉
焼け野原と化した我が街	白岩タイ
無残な、我が妻、我が子	真野善光
助かったわが娘	三浦てる
戦火の中、姉の無事を知って	間谷愛子
川面に浮かぶ死体	寺田たか
最愛の伯母を失う	豊田一男
火の海の恐怖	桜井恒子
死臭漂う異様な町並	細谷かん
身重な体で戦禍を逃れる	青山むめ
石壁に残された人影	小松スミ子
恐怖の江東橋	南雲数英
眼下の戦禍	石井清志
葛西橋上の夜と昼	阿部登美子
悲惨な乙女の死	加藤益雄

戦時下の人間の条件……………長谷川 幸

モンペをぬいでねたいなあ……………茅野 カツ

編集後記
218



焦土からの叫び――

3・

10

東京空襲

平和への証言



はやふねますえ
早船増枝(56歳)

今から三十年前のあのいまわしい事は、早く忘れようと思っていましたから、思い出せないこともあるかも知れません。

当時、私は二十六歳で、二歳になる息子と、おじいちゃん、おばあちゃんの四人で家を守っていたのです。昭和二十年三月九日の夜八時頃だったかしら、飛行機の爆音、サイレン、そのけたましさがいつもと違う。ハッと我に帰った時は、空が明るくなったのであわてて外に出てみると、あっちこっちで火の手が上っていました。火はもの凄いい勢いで、アッという間に町全体に広がっていました。

「逃げよう、おじいちゃん、おばあちゃん！」二歳の子を背負って夢中でかけだしたのです。ただ自分が逃げることでせいっぱい、本当に人のことなんか、かまっていられませんでした。「熱いよー助けてー」という女の子の声が聞こえたように思えます。しかし「ゴメンね、私だっ
て精一杯」と心の中でわびながら先を急いだ。目と鼻の先にある、深川小学校までが随分長く感

じた。あっちからも、こっちからも避難の人が来た。

やっぱりそうだった。今日は朝から嫌な感じがしていた。「何か変だね、おばあちゃん」、おばあちゃんからも同じ答が返ってきた。昨日までも、時々バカーンと恐ろしい音が近くで聞こえてその音が聞こえる度に、一つ一つと空地がふえて行った。早く東京から逃げようと思っていた矢先だった。幸いおじいちゃんもおばあちゃんも小学校まで逃げる事ができた。服がボロボロになって、壁にもたれかかっている人がいる。ゴォーというねりをたてて風が学校のドアを開けようとす。皆んなで必死になって押さえた。そのうち、上の階の人の居ない所をねらって学校にも火が廻ってきた。

私達は、強風と煙で目が明けられない中を森下公園にころがり込んで、どういうわけかおばあちゃんが持ってきた蒲団をドブの水につけて、頭から四人でかぶって、夜明けまでまんじりともせずに、朝を迎えた。火が下火になったのを見はからって、焼けた家の前に行って茫然としていた。誰もが同じ恰好をしていた。でも私達はまだよかった。ほとんどの一家が、家族の一人以上を亡くしていた。往来で気が狂ったようにわめいている人がいる。九死に一生を得たのだろうか、一晩で二十も歳をとってしまったように、黒髪を真白にしていた人もいる。

焼け跡の仕事を老人にまかせて、私は息子と千葉の知り合いの所へ行くことにした。両国から列車はなく、小岩まで歩くことになった。菊川橋まで行くと、向うから来た人が、この先は、と

ても女では行けない、三ツ目通りから行きなさいと言われた。逃げる途中、煙にまかれて死んだ人がゴロゴロしていて、それをまたいで通るのは女には無理だというのである。三ツ目通りには死んだ人がいたけれど、両側に寄せられ、真中があいていた。途中で会ったおばあさんが、私の帯につかまって目をつぶってついて来なさいという。目をつぶって見ないようにしても自然に目が開いてしまう。服は全部焼けてしまい裸の死体が人形みたいに転がっていた。どれもこれも同じ方向を向いて、この辺は余程ひどかったのだろう。防火用水の中に、お風呂呂に入るみたいにしてそのまま息の絶えている人の、うらめしそうな顔、また、一番残酷なのは赤ちゃんを背負ったまま亡くなっている人だった。

もう嫌だ、何を見るのも……。

橋の上にたくさんの人だかりがあって川面を見ていたが、私は目をつぶって通り過ぎた。小岩の土手の近くまで行くと、変な臭いがしてきた。土手に逃げてしまい、そのまま行き場を失って、窒息死した人を焼いているのだという。人間を焼くにおいてこんなに嫌なにおいだったのかしら……。

忘れたいために無理やり記憶を消してしまったので、とりとめのない話になってしまったが、私は無事に千葉へ避難することが出来、おじいちゃん、おばちゃんも数日後に千葉へ行ったのだが、逃げる途中でのいろいろな光景を思い出すと、家族の無事を手を取り合って喜こんでいるわ

けにはいかなかった。三月九日夜からのことは本当に恐ろしかった。怖かった。地獄だった。

私達はまだ良い。助かったから。煙にまかれ火に焼かれ、苦しみ悶えながら死んで行った人達は、あの世でなく、私達の生きているこの世界で、地獄の苦しみを受けたことであろう。現在でも世界のあっちこっちで戦争をしている。何も悪いことをしていないのに、何でこんな目に合わなきゃならないのだろう。戦争でいつも犠牲になるのは、何もしていない、一生懸命生きようとしている民衆なのです。同じ人間同士が何故……。

新聞をみるたびにとても人ごととは思えません。あんな目に会うのは私達だけでたくさんです。もう二度と戦争なんて起きないでほしい。戦争に会った人達の同じ願いだと思います。広島よりも凄惨な核爆弾とかなんとかで、今度戦争が起きたら二度と助からないのでしょうか。

嫌なことを思い出してしまったけれど、私達のこの話が戦争を知らない若い人達に少しでも戦争の恐ろしさを知ってもらえるのなら、またいつでも話します。